金色の海

夫馬基彦
fuma motohiko

金色の海

大馬基彦
fuma motohiko

福武書店

夫馬基彦（ふま・もとひこ）
一九四三年、愛知県一宮市生まれ。
早稲田大学仏文科中退。七七年「宝
塔湧出」で中央公論新人賞受賞。著
書に『夢現』（中央公論社）『楽平・シン
ジ そして二つの短篇』（福武書店）
『美術館のある町へ』（創隆社）『熱と瞑
想』（鳥書房）などがある。

金色の海

一九八八年三月一〇日　第一刷印刷
一九八八年三月一五日　第一刷発行
定価一四〇〇円

著　者　夫馬基彦
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

©M. Fuma 1988

ISBN4-8288-2257-7 C0093
NDC913 194 220p

目次

緑色の渚　5
金色の海　85
ブルー・エイシア　151

裝丁菊地信義

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

金色の海

緑色の渚

目のわずか斜め上あたりで、明暗が揺れている。いや、正確に言えば、微風に枝葉が時折りそよぐため、木洩れ陽が空中や額の上で、白黒の斑になったように感じるのである。葉はさしずめ、日本の合歓の木のそれとそっくりだから、斑も細かく、柔い。葉むらのところどころには、これも合歓にそっくりなピンクの花が、ほそい蕊を光にふるわせている。

向うには椰子の木が七、八本散在し、それぞれ葉の下一メートルあたりに、大きすぎる首飾りの如く実を数個ずつぶら下げている。位置がもう少し下で実も二つだけなら、多分乳房を連想するだろうが、しかし、それだとさすがに奇形じみるだろうか。その椰子の根もとには黒い水牛が二頭いる。一頭は前脚だけを立てて寝そべり、一頭は立って草を食んでいる。鼻の穴と鼻輪はよく見えるが、目と涎は見えない。

牛の右側五、六メートルほどには、白い道がかすかにうねって向うの小集落まで続いている。集落は道の左側に白壁の、石かコンクリートかひょっとしたら煉瓦造りの家が三軒、右側に椰子葉葺きの木造小屋が二軒ある。白壁のポルトガルふう家屋の一軒は「タベルナ」という看板をかかげたレストランであり、右側の、ほぼ真っ黒にしか見えぬインド式家屋の一軒は、飴玉から雑貨までを暗い土間に並べたよろず屋である。

道はその両者の間で切れて見えるが、それはやや坂をなす道がそこで頂きになるためで、道はむろん向うの海辺にまで続いている。その海には陽差しの強い日中の今頃は誰もいないだろう。

道には今、坂の頂きに白いパジャマふうズボンに白シャツを垂らし、腹を突き出した中年インド人が一人と、もう少し手前の右の脇道から金髪とブルネットの長髪白人青年二人が、いずれもサンダルばきで、ズボンとシャツの裾をひらひらさせながら出てきた。ただし、インド人は黒い、多分革製サンダルで、長髪青年たちはゴムサンダルである。インド人はいかにも彼らの社会にどっしり根をおろした金満家の大人であり、白人青年たちは、今はこういう用語はなくなったかもしれぬが、いわばヒッピーふうである。青年たちは脇道の先の野原にポツンとある公営ツーリスト・ドミトリーから出てきたに違いない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

二月の午後の、白い光のなかの白い道を、彼らがゆらゆらこちらへ歩いてくる。路上一メートルほどの高さには陽炎がたゆたっており、左手の椰子の上では、目も鮮やかな黄色と緑色の大型鸚鵡ようの鳥が一羽、クルリと扇形を描いて飛んだ。

目の前の飲みかけのラッシーをストローで一口啜ってから、斜め左へ目をやると、ソフィーもこちらへ目を向けたところだった。褐色の皮膚に大きな黒目と紅い唇が艶やかだ。

「今日も絵はかかないの？」

その紅い唇が丸くなったり平たくなったりして、英語の言葉が出てきた。

「ああ、まるでそういう気にはならない」

正確な言いまわしか否かは分らぬが、ともかく中広己はそんなつもりで答えた。外国語は、はっきりした意味の名詞や形容詞を伴わぬ何気ない言い方のほうが難しい。ソフィーは少し考えてから、微笑んで言った。微笑むと、紅い唇の両端が耳に近くなる。

「フフ、妙なものね。やっぱり画家も職業となると、そんなものかしら」

「まあね。ともかくここにいると茫となって、何もする気にならない。それに、元々絵をかくつもりで来た訳じゃないし」

「休暇なんですものね」

イエスと答える前に、何ものかがそれを押しとどめた。休暇といえばそうも言えたが、少なくとも日本を出る時はもっと明確な目的があったつもりなのだ。それが今は妙なことになっている。気分も目的も白い陽光に照らされて、陽炎のようにたゆたっている。

「あなたの方も何もしないね。このところは毎日、ここか海辺を行ったり来たりしているだけだ。直線にして僅か二百メートルの日常」

逆襲のつもりでわざと目を瞠ってみせると、ソフィーも同様に目を瞠ってみせた。

「そう。でも、その二百メートルは自分の意志で選んだものだから、私は十分自由で、満足しているわ。つまり僅か二百メートルの充足。いけなくって？」

「いいや、結構至極です。昔、あるロシアの作家は、一人の人間に真に必要な土地は縦二メートル、横一メートルの長方形分にすぎない、と言っている」

「へーえ。だけど、それ、いくら何でも少し狭すぎるわね。きっと何か隠した意味があるんでしょう」

「そう。この大きさは死んだ場合の棺桶埋葬用の面積」

二人は顔を見合って笑った。笑ってから、不適切な話題ではなかったかと少々気になったが、ソフィーは膝までの濃緑色七分ズボンをぴったりまとわせた細身の長い脚を、伸び

やかに鉄製椅子から投げ出したまま、全く屈託なげだった。インドふうの臙脂の胸あてをつけているだけで、あとはすべて露出している上半身の柔げな皮膚が、匂わぬ匂いとなって漂ってくる。なめらかな褐色の肌に、細からず太からずの腕、肩、腹部。いや、腹部だけは何本かの皺があって、褐色の間からやや白い皮膚を縞のように見せている。呼吸をするたびゆっくりそれが伸縮して見えるのは、いくぶんかの贅肉がある証拠だろうが、それにしてもその白さの部分はなぜあるのだろうか。陽焼けせぬためというなら、地肌が元来その色ということになるけれども、ソフィーは時折り平気で見せる腋の下まで見事に統一された褐色の、混血児なのである。それも、父母それぞれがすでに混血児の、いわば混血二世である。

それを聞いたのは、初めて口をきいた昨日の、同じ午後の、この場所だった。相席はこの屋外茶店では常識だが、それでも先に坐っていたソフィーの横にこちらが自然に席をとったのは、他のテーブルがいずれも若い人たちばかりだったせいだろう。四十一歳の中年としては、二十歳前後の青年ばかりの席はどうも落着かない。ソフィーは頭の周りに縮れっ毛の長い髪を繁らせ、上半身は今日と同じく胸あてだけをつけ、下半身はブルー・ジーンズに平底の真っ赤なパンプスという、都会なぞ他の場所だったら十分に若々しいいでた

ちだったが、ここでは却って、あまり若くないことを示していた。他の女の子たちはたいてい、髪は無造作に束ね、衣類はヒッピーふうにぞろりとした物を着、足にはゴムサンダルをはき、要するにもう少しむさ苦しいのである。実際、隣合せになってみて、二、三日前から顔程度は知っていた気安さから、「ハロー」と声をかけ合い、見るともなく見てみると、ソフィーの目尻や手の甲には小さな皺があって、歳は多分三十二、三だろうと思われた。

あとで聞くと、ソフィーの方もこのとき中を三十五、六だろうと思い、安心したらしい。そのせいか最初に会話のきっかけを作ってきたのは、ソフィーの方だった。

「おたく、どこから来た人？」

「日本の東京、そちらは？」

「アメリカ。ニューヨークよ」

「インドへ来たのはいつ？」

「半月前。そして、ここへ来たのが三日前。おたくは？」

「インドが十日前、ゴアのここは六日前からいる」

「目的は？」

「……」

「じゃ、インドは好き？」

「好きな面もあれば、嫌いな面もある。全体に騒々しい点は嫌いだ」

「全く賛成ね。それであたしもここへ逃げてきたの」

話はそんなふうに進み、やがて職業と名前を名乗り合い、互いの正確な年齢も告げあった。ソフィーは航空会社の元事務主任、歳は三十二。女性に年齢を聞いたのは、相手がこちらの年齢を聞いて、

「ホホホ、東洋人は若く見えてトクね」

と、まるで自分の方が年長であるかのように笑ったからだ。中の方は職業を聞かれたとき、「風景画家」と答えようかと思ったが、結局「画家」とだけ言った。

ソフィーが自分の血のことを言ったのは、そのあとだったか。文脈としては、ソフィーが中の、日本人としてはやや尖り気味の鼻と広めの額をじっと見て、

「おたくは純粋の日本人？」

と、妙に真面目な視線で尋ねてからだった。

「ああ」

一瞬戸惑ってからそう答えると、ソフィーは、
「あたしはミックスとミックスのミックス。分る？　つまり、両親がそれぞれ黒白のミックスで、だからあたしは¼×2ずつの結局ハーフ・アンド・ハーフ。複雑で簡単な話よ」
と微妙に笑ってみせた。
中は「なるほど」とだけ返し、あと少しとりとめない話をして昨日は別れた。
今日は多分、双方とももう少しお喋りするつもりでやってきたのだ。だが、話は少し続いては、途切れる。どちらも無理に続けようとはしないからだ。二人とも話が途切れると茫と前方を眺め続け、そうして時折りラッシーを啜っては、また何か話し始める。
「日本ではどんな絵をかいていたの？」
「風景」
「田舎の？」
「色々だけど、大抵そう。山や谷川の源流や田園や森」
「油？」
「そう」
「写実的？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.